

八重山で共に暮らす島人を撮影したシリーズ。  
暮らしの中から見つめる被写体に共感と敬意を  
込めて撮影している。



東京生まれ、仙台育ちの関有香子<sup>せきゆかこ</sup>さんは、宮崎の医学部を卒業後、福岡、大阪、東京の病院や診療所で勤務した後、新型コロナウイルス発生を機に沖縄本島に移り住んだ。けれども、小学生の娘が学校になじめず、小規模校に通わせたいという思いから、2021年の4月から竹富島の診療所に勤務を希望し、家族で竹富島に移り住んだ。

関先生が沖縄に移る前は、東京の下北沢に小さな在宅支援診療所を立ちあげ、たった一人で様々な患者の往診をしていた。

「一人で全てをこなせば人件費を抑えられるので、その分一人ひとりの患者さんをじっくりと診ることができると思ったんです。困難症例専門の在宅支援診療所として、私が担当した方のほとんどは、末期癌の患者さんや、現代医療の隙間に落ちてしまったような患者さんたちでした。世田谷という土地柄、もの凄なお金持ちから貧困状態にある方まで、本当に様々な患者さんを診ました。あの時の経験は、濃密で忘れがたい経験です」

関先生は、医者になって良かったと話す。

「医者という仕事は自分には凄く合っていたなと思います。人に決められるのを待つのではなく、全部自分で決めなくてはいけないというところが、大変だけどやりがいもあって、裁量権がある仕事なので職人ばくて好きです」

新型コロナウイルスが蔓延し始めた頃、私も感染し、未知のウイルスへの恐怖に怯えた。関先生は、検査後も毎日電話やLINEで経過観察をしてくれた。その口調や仕草に安堵したことをよく覚えている。

9月から、パートナーの研究のため沖縄本島へと移動になる関先生。旅立つ前に、患者というポジションではないところで話をしてみたかった。先生は、私の想像を軽やかに超える奥行きとおもしろさを秘めた魅力的な人だった。

「病人は、豹変してしまうときもある。でもその人は豹変してもその人だからね。同じ人だから」

たくさんの人を診てきた先生の言葉には重みがあり、ずしりと心に響いた。

水野暁子 みずのあきこ

1973年千葉県に生まれる。1986年に家族とアメリカへ渡る。1996年 School of Visual Arts (New York) を卒業。1999年に竹富島に移住。現在子育てをしながら撮影活動中。

●島人へのインタビューをまとめて紹介している YouTube チャンネル「八重山ライブラリー」も。

●フォトエッセイ本『八重山、光と風の葉をはさんで』。発注は、右 QR コードホームページの Contact から。



Akiko Mizuno Photography



八重山ライブラリー